

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

旅・情・心

山口 信治



現代人にとって旅は、一種のステイタス・シンボルなのだ。老若男女を問わず文化のまゝ、子として肩身のせまさを味わうまいと、誰も彼もがこぞって旅に出る。ところで、旅には例外があるのだろうけど多少の困難やハプニングがつきものだ。今更、俳人芭蕉を引き合いに出すまでもないことだが、山海の難、食いものの難、人の難、族の難、

ことばの難、これみな想像を絶するものである。

私ごとになって恐縮だが、この度ヨーロッパに行く機会があった。僅か三週間ちよつとの旅だが、欲の皮のつつ張つたアレスもコレも式のもので、八ヶ国を廻つてくることになつてしまつた。楽しかつた反面、ときとして行く手をはばむハブニングに苦しめられた。なんといつても飲み水の難、肉食の難、ことばの難、盗難、粉失の難、馬ふんの難、雪溪の難、金の難、宿の難、予約した飛行機にとり残された難など枚挙にいとまがないほどいろいろなことが身辺には起きた。羽田での警官や税官たちの嚴重なチェックを終えて、一路わが国の誇る新幹線に腰をおろして、これらを思い出していた。「旅は情人は心」ということわざがあるが、改めて旅と人の心に教えられるものがあつた。

そこで、今回はそれらの難からとくにパリーでの金の難について述べることにする。雄大なマッターホルンを後にして、ピルゲからローザンヌを経てパリーに向う最終のTEE（特別列車）に乗り込んだわれわれは、予定通り午後十一時最終駅に着いた。早速 exchange だ。ようやく探し当てたが、時すでに遅く、業務を終えたから明日九時に来いということだ。僅か五分も経つていないのにこうだ。頭を下げて懇願したが断念せざるを得ない結果に終つてしまつた。地下鉄の改札口へ、ホテルへ、有料便所へ、交番へと救いを求めてさまよい歩いたが、あつけなく断られてしまつた。地図をみる、目的のホテルまでは四五十軒、地下鉄とタクシーしかない。是が非で

も明朝八時までには着いていなければならぬ。八月一日八時というのが至上命令だ。それにしても、懷中に潜ませている米ドルも小切手ではどうにもならない。ましてスイスの百フランもここでは全く無用の長物で、仲間のいるホテルに電話する十フランにもならないのだから腹立たしい。次々に名(迷)案が浮ぶ。もしや日本人がまだ街に」とか、「多少恥ずかしいが大道で泣いてみては」とか、どれも努力の割には空しい結果に終つてしまつた。駅内を警備する警官までも肝心なことになると、「英語の I am sorry, but I cannot speak english well. とくる。もはや八方ふさがりで身動き一つ出来ない窮地に追い込まれてしまつた。同行した日本女性に群がるパリー子を追いはらいながら、他方では金の苦面をせねばならぬ、身も心も疲れ切つていた。そこに、ちどり足で近寄つてくる見知らぬ紳士がいた。そして「少し英語が分るか」というまぎれもない耳慣れた英語で尋ねてくれた。早速空港に、ホテルに電話してくれれた。だが夜の二時を廻つていたこと故、希望にまでつなげるものではなかつた。それでも尚、彼は駅頭のタクシーの運転士に我々の事情を一人一人に話してかけ合つてくれた。ついに、みるにみかねた老運転士が引きうけてくれることになつた。運賃も米ドルで六ドル、しかも、それをスイス・二十フラン(七ドル)で交渉が妥結した。車中われわれは、その見知らぬ紳士の親切に改めて感謝をした。しかも、われわれのわずかばかりのお札をも受け取ろうとせず、さり気なく立ち去つてしまつた。この紳士の行為が、旅のペリオドとして私ども

の心にいつまでも新鮮な思い出として残った。セーヌ沿いの道を車のヘッドライトはプラタナスの街路樹をうつして走った。

(社会学部助教授)

来た道・往く道

山脇 秀 候



私は大正九年、福岡県久留米市草野町で生れた。六才の時父が急逝し、母は廿八才の若後家で九才の姉をかしらに五人の子供を連れて自分の親元へ帰った。私の弟は、小学校二年生で父の冥福を祈る為に九州日光と言われた草野専念寺江上秀静師に入門した。併し、寝小便の癖がなおらないので、小学校五年になった私が交替して弟子になった。長男の私を出家さす事は母親もためらったらしいが、生活苦を救う為に一人でも寺で面倒見て頂く事が我が家の生活を潤して呉れたらしい。私は小学校を卒業し、県立中学校に入学したが、事情があつて

二ヶ月で退学。高等科に入学、二年で卒業し、直ちに大本山善導寺宗学院に入学、三年で卒業し、友人は教師養成所に行ったが、私は明善中学の夜間部に入学。在学中、兵隊検査に甲種合格し、三年修了と同時に昭和十六年四月一日西部五十三部隊に入営、大東亜戦勃発と同時にビルマに派遣、昭和廿一年六月に復員。昭和廿二年三月佛教専門学校に入学、廿三年現在の滋賀県愛知郡湖東町来迎寺に養子として入寺した。

私が佛専に入学した頃は、語るも涙、聞くも涙、全く明日も知れない諸行無常の理を、学校そのものが如実に示していた。南寮と北寮があり、私は南寮の住人で便所の前に三人で住んでいた。腹のへつた寮生は、佛専近所の野良荒し、恵れた寮生は、田舎の寺より米を運んで喰べていた。我等の様な貧乏学生は何も喰うものなし、ミカン箱の勉強机の前に坐ると腹の虫がとつてもない声で泣き出す。辛抱していると横で恵れた学生が、一人前の小さな鍋で自分の分だけ炊いて、美味そうに喰っている。

横目でながめながら空即是色の般若哲学の勉強、色を越えて空(喰う)のため息許り。北寮の方から木を切る様な音がすると思つていたら、雑炊をたく燃料に北寮廊下をはがして板を切る音、現在連合赤軍の暴力革命の先駆者は応しく我等佛専の先輩であった。其の暴力団の親分が、現在大阪府下の教育長で頑張っている。昭和廿五年に佛専を卒業し、直ちに正大三年に編入、大学を出て大学院に残り修士課程を修了、昭和廿九年三月より現在に至る迄、一筋に浄教布宣の道に、此の道